

## 第十七回 (株) USEN 番組審議会 議事録

開催日時：平成 18 年 2 月 14 日 16 : 00～  
開催場所：(株) USEN 山王パークタワー13F  
プレゼンテーションルーム

出席者 委員：小林亜星、有馬祐行、池田憲一、山本武司、渡辺英夫（順不同・敬称略）  
放送局側：7 名

## 議事内容

1. 会社動向についての報告
2. 放送事業についての報告
3. 番組課題

クラシック系番組について (AE-12 やさしいクラシック、BF-40 作曲家、BF-45 音楽の友)

## 4. 番組審議

- まず前提として、SOUND PLANET では、様々な番組で 2006 年「モーツァルト・イヤー」に因んだ内容を放送しているが、現実には市場はそれほど盛り上がっていないという現状がある。理由はファンの経済状況や高齢化、各団体の演奏場からの撤退など様々である。
- 2006 年「モーツァルト・イヤー」に因んだ内容の番組を、夏までに重点的にプログラミングしていくとよい。
- モーツァルトはそのカリスマ性や楽曲の多面性によって、ビジネスとして成り立ちやすいが、その楽曲は主張が少ないという点で、耳に優しく BGM に適しているという良い面と、印象に残りづらいというウィークポイントがある。両者を効果的に使い分け、それぞれの楽曲の特性を生かして番組を構成するとよい。
- クラシック音楽は現代の弔事などに適しているため、成長産業への BGM 提案としての事業確立の可能性を秘めている。その中でも特にモーツァルトは「死」に対する美しさや儚さ、切なさを表現しているレクイエムを数多く世に残している。それは「生」に対する説得力を生み、生命力をよみがえらせる力に満ちている。
- モーツァルトの楽曲は、楽章毎にそれぞれの特性を生かした効果的な使い方ができれば、より多くの顧客満足を得て、リスナーの獲得にもつながって行く。
- 弦楽器／ピアノの 2 大楽器を中心とした番組に分類されすぎてはいないか。もっと柔軟な区分の仕方をした方がよい。
- 放送中の楽曲は弦楽器のボリュームをもう少し上げる必要がある。リスナーに品質を聴かせる為には、聴き方（より効果的なボリュームの微調整方法など）ガイドがあった方が親切だ。
- 現在のクラシック音楽環境は、メディア／ライブの二分化が著しい。時代の変化を放送でも感じられるよう、USEN がもっと楽団やライブ・コンサート経営陣と協力し、ライブ会場の雰囲気を取り入れた多面性のある番組作りを行っていくことに期待している。
- クラシックファンの意見をより積極的に取り入れた番組作りを目指して欲しい。
- BGM として、USEN のクラシック系番組は非常に効果的である。公共の場でも多く使用されていることなどを考慮すると、主張の激しい楽曲より耳に優しい音楽がより効果的である。
- 作曲家が主体の番組も必要だが、もっと演奏家に光を当てた番組は需要があるのではないか。

- AE-12「やさしいクラシック」の「やさしい」の意味が不明瞭である。
- BF-40「作曲家」はリスナーターゲットが不明瞭である。個人向けであるなら、クラシック上級者も満足できるよう、楽曲のラインナップをより充実させるべきだ。
- BF-45「音楽の友」は「音を学ぶ」という原点に返れるという点で非常に効果的である。トークや解説によって、リスナーは番組にのめり込むことができる。より専門的且つ深い内容のコメントもあればより良い番組となりうる。
- クラシック音楽は、「楽しませる」と「啓蒙していく」2種の要素が必要である。
- 朝／昼／夜を区別したタイムテーブルでの構成を行うなど、ドラマ性を重視した番組放送すると面白いのではないかと。
- 本当に求められているクラシック音楽は、五重奏などの小編成でも質の良い音をタイミングよくリスナーに届けることが大切である。
- 現在、クラシック音楽に対してテレビやラジオが消極的になりつつある現状を踏まえ、USENは良質な音楽の土壌をしっかりと築いていって欲しい。
- 現在のクラシック界では、コンテストの勝者ばかりが取り沙汰され、新しい情報のみが氾濫している。競争ばかりを追うのではなく、過去の録音や歴史ある楽曲を絶えることなく放送していくことが非常に大切である。歴史ある楽曲こそ価値があり、伝統を伝えて行くことが本当の豊かさである。USENは多チャンネルであるがこそそれが実現可能であり、ビジネスチャンスとして、大いに展開していって欲しい。